



2013年6月5日放送

漢方を理解するための10処方

日本漢方振興会漢方三考塾 講師 高山 宏世

(3) 麻杏甘石湯 (まきょうかんせきとう)

この処方のキーワードは「肺熱の咳嗽」です。

弁証のキーワードは

- ① 喘息や烈しい咳、②口渇・粘タン、③発汗傾向です。

(どんな処方か?)

肺は宣発と肅降という2方向の働きによって、その機能を果たしています。肺の呼吸とは即ち一呼・一吸により宣発と肅降を交互に繰り返す働きです。宣発や肅降が妨害されると、咳や呼吸困難が生じます。

麻杏甘石湯は外感病で病邪が体表からそれに続く肺に侵入し、熱と化してその熱が肺に籠もり、盛んな肺熱が宣発・肅降を阻害して肺気を上逆させる結果、烈しい咳・タン、時には呼吸困難を惹き起こす場合を専ら主治する処方です。肺の熱は咳を生じると同時に体の津液を体外に逐い出すので「汗有リテ喘ス」という症状が起り、汗の蒸発で熱は一時的に下がりますが、津液が汗になって外泄した後は益々肺熱が体内に鬱積するので、内熱と津液不足で反って発熱・咳・呼吸困難は烈しくなり、タンは粘って喀出し難くなります。

実際に本方を用いるときは実熱があって咳や呼吸困難があることを目標にし、汗の有無にはあまり拘る必要は有りません。

四診では、表証が残り実熱証なので脈は浮滑数。舌は肺熱のため乾燥気味で時に黄苔を現します。特別な腹証は見られません。

(麻杏甘石湯の原典)

出典は『傷寒論』の「発汗後、更ニ桂枝湯ヲ行ル（やる）ベカラズ。汗出テ喘シ、大熱無キ者ハ麻黄杏仁石膏甘草湯之ヲ主ル」（太陽病中篇 第63条）からです。

太陽病を発汗させるのは正しい治療法ですが、やり方が適切でなかったため体表の邪が発散されないだけでなく、さらに肺に侵入して邪熱と化したものです。熱のため津液が外に逐い出されるので汗が出、邪熱によって肺の正常な呼吸機能が障害されるので、肺気が上逆して喘（呼吸困難や咳）を起すときは**麻杏甘石湯**で主治せよ、という意味です。

(麻杏甘石湯の処方構成)

麻杏甘石湯証は肺熱証で、単純な表寒実証の太陽傷寒ではなく、本方は太陽傷寒の主方である**麻黄湯**から温性で汗を発する桂枝を除き、代りに寒涼性で熱をさます石膏を配合して、麻黄・石膏・杏仁・甘草の4つの生薬で構成されている処方です。肺の熱を冷まして肺機能の回復をはかる（清熱宣肺）のがこの処方の主眼です。

君薬は性味辛温の麻黄です。麻黄は特に外感病初期の治療には欠かせない最も重要な漢方生薬の一つですが、原料は中国東北部やモンゴルなどの乾燥地帯に自生するマオウ科の常緑小低木の草麻黄の地上茎から節の部分を除いた物です。先ず肺気を開通して咳を止め喘息を治す止咳平喘の働きと、一方温性で風寒に因る外感病を発汗解表する作用が有り、発熱悪寒・汗をかかず頭痛・筋肉痛・関節痛などを呈す太陽病の傷寒を主治します。またその他に利尿作用もあるので、水飲の停滞や浮腫、腫れ物の治療にも用いられます。

臣薬は鉉物性生薬の石膏です。石膏は天然の含水硫酸カルシウムの結晶で生のままの物を生薬として使用します。石膏の性味は辛甘大寒で清熱・潤燥の機能を持ち、外は体表の熱を発散し内では肺と胃の熱を冷やすと共に津液を生じて口渴を止め、煩躁を除く代表的清熱除煩薬です。止咳平喘の麻黄と清熱潤燥の石膏を配合すると、肺熱に因る咳嗽や喘息を治すのに抜群の効果が得られます。君薬の麻黄は**麻黄湯**や**葛根湯**のように桂枝と組み合わせると強い発汗解表作用を現わし太陽傷寒を治しますが、本方のように大量の石膏と組み合わせるとその温性を失い、発汗には働かず肺熱を冷まし鎮咳と利尿の効果を現わすのです。従って本方の石膏の分量は通常麻黄の3倍から5倍の大量を用います。

佐薬の杏仁は性味苦辛で温、専ら肺気を降し咳嗽を止め喘息を鎮める生薬です。本方の中では君薬の麻黄を助けて、逆上する肺気を下方に引き降ろして咳嗽や喘息を鎮めタンを除く役割を果たします。

甘草は使薬で、ここでは火で炙った炙甘草を用い性味は甘平です。何事によらず急迫した症状を緩和する性質を持ち、また処方に配合された生薬同志が互いに妨げ合わず協力して働くように調和させる独特の働きを持っています。

(麻杏甘石湯の臨床応用)

以上の処方構成と各生薬の機能から見て、本方は処方全体としては病名にかかわらず肺熱に因って生じた烈しい咳や喘息に奏効します。従って臨床の場では烈しい咳・タンを伴う肺炎、気管支炎、肺化膿症、慢性閉塞性肺疾患（COPD）などの気道感染症から、肺熱を伴うタイプの気管支拡張症、気管支喘息などに広く応用されます。

咳や喘息は外感の邪が肺に侵入して肺の宣発や肅降を妨害し、肺気が突発的に上逆することによって生じるものです。外感の邪に因る咳嗽には肺熱の他に、外から侵入してきた風寒の邪に因って直接肺が冷やされて宣発・肅降が失調して生じる肺寒の咳嗽もあります。従って外感病の咳を診た場合、先ず肺熱か肺寒かを正しく鑑別する必要があります。肺熱の咳や喘は多く**麻杏甘石湯**証ですが、若し肺寒の咳嗽であれば太陽傷寒に属し発熱悪寒・汗無く脉浮緊・頭痛や筋肉痛などを伴う表寒実証なので、辛散温通して肺気を通じ鎮咳平喘する**麻黄湯**（麻黄・桂枝・杏仁・甘草）を用います。

咳嗽や喘息の治療は病変の寒熱の他に肺や気道の燥湿も考えて行なう必要があります。若し湿痰を伴った肺の湿熱証で呼吸が障害されて咳嗽や喘息があり、その上タンが喀出し難い場合には本方に湿熱を治す桑白皮一味を加えた**五虎湯**という処方が向いています。若し肺の陰虚証で慢性の虚熱があると気道が何時も乾燥して一寸した刺戟で大逆上気という烈しい咳を生じます。このような肺陰虚熱の咳嗽や喘息に対しては肺を滋潤する麦門冬を君薬にして、麦門冬、半夏、人参、粳米、甘草、大棗から成る**麦門冬湯**を用います。

また逆に、痰飲即ち余分な水分を日頃から体に貯留している病人が風寒の邪に外感すると、邪が体内の痰飲を刺激するため、肺の中で痰飲が増えて肺気と共に上逆し、太陽傷寒の症状に加えて大量の水様タンを伴う咳や喘息を生じます。その時は**麻黄湯**の杏仁を乾姜・半夏・細辛・五味子・芍薬に替え、太陽傷寒を治すと共に肺を温めて肺気の上逆を止め鎮咳と祛痰に働く**小青竜湯**を用います。

これらの処方を臨床で応用する実例を考えると、例えば慢性閉塞性肺疾患（COPD）を持つ人が新たなカゼや有害物質を吸入して喘息様発作を起した場合は、元来ある肺熱の増悪ですから肺熱の喘咳の**麻杏甘石湯**を用い、一方春先に多くの人々を悩ませる花粉症は肺熱は無く、アレルギーに因って体内に在る痰飲が刺戟されて咳タンや鼻汁を生じる要因が顕著で、これは外感病に痰飲証が加わった例ですから**小青竜湯**を用いる場合が多いわけです。